



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	共感する我：メヌ・ド・ピランの心理学と道德の基礎についての試論〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	長坂, 祥悟
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16490号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94951
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Shogo_Nagasaka_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 長 坂 祥 悟

主査 教 授 村 松 正 隆
審査委員 副査 准教授 宮 園 健 吾
副査 教 授 竹 内 修 一

学位論文題名

共感する我—メヌ・ド・ビランの心理学と道德の基礎についての試論

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、メヌ・ド・ビランの後期哲学の問題意識を、その中期哲学との連関の中で浮き彫りにし、この後期哲学の諸側面を哲学的、思想史的に、緻密に分析するものである。本論文の成果は、次の三点にまとめることができる。

第一に、メヌ・ド・ビランの後期道德哲学の全体像を描き出したことが挙げられる。ビランの後期哲学を巡る研究は世界的に見ても数が多いと言える状況にはなく、日本語の研究も数点を数えるのみである。こうした中、本論文は、ビランの道德哲学の課題を、当時の思想状況にも目を配りつつ中期哲学との対比の中で明確に規定している。また、〈自我〉と〈他者〉とが取り結ぶ関係の根底に「共感」概念を取り出し、これがビランの道德哲学の根底にあることを明らかにしている。さらに、ビラン道德哲学と宗教哲学との関連について解釈を与えている点も、重要な研究成果に数えることができるだろう。加えて、ルソーやカントなど、ビランと時代を近しくしている哲学者たちの思想との比較を通じて、ビラン道德哲学の特質を描き出したことも、本研究の成果と言える。

第二の成果として、18世紀末のフランスにおける「共感」概念の射程を描き出した点が挙げられる。スコットランド学派道德哲学において重要な地位を得た「共感」は、コンドルセ夫人による『道德感情論』の翻訳、並びにこの翻訳に基づくコンドルセ夫人独自の考察を経てフランスに流入するが、本論文はこのように導入された「共感」概念が、ビランの道德哲学の基礎となっていることを緻密に跡付けるものである。この研究は、「共感」概念を巡る哲学的研究に貢献すると同時に、同概念を巡る思想史的にも重要な成果となっている。

第三の成果として、ビラン道德哲学とミシェル・アンリの後期哲学との比較が挙げられる。従来二人の哲学の比較は、主に身体論の領域でなされており、情感性や共同体を巡る両者の親近性については、示唆されることはあれ具体的な成果は挙げられていない状況にあった。本研究は、ビラン道德哲学における「共感」ならびにミシェル・アンリにおける「情感性」概念の類似性に着目しつつ、二人の哲学者が、「生」の領域に〈自我〉と〈他者〉との関係の根拠を見出したことを明らかにし、両者の比較研究に新たな成果をもたらしたと言える。

・学位授与に関する委員会の所見

本学位論文は、メヌ・ド・ビランの後期道德哲学の諸側面を、その中期哲学との連関の中で記述し分析するという課題をよく果たしており、この領域での研究が少ない現状において、貴重な成果を挙げている。また、フランス革命期における道德哲学に関する思想史的研究としても、重要な成果を挙げているといえるだろう。特に、スコットランド学派からグルーシーやカバニスを経ての「共感」概念の受容過程を解明した点は、思想史的にも重要な成果となっており、また、ビランの後期哲学とミシェル・アンリの後期哲学との比較は、フランス思想を基盤とした共同体論に新たな観点をもたらすものといえる。

もっとも、審査の過程ではいくつかの問題点も指摘された。

これはメヌ・ド・ビランの道德哲学が混成的な性格を持つことにも由来する点ではあるが、こ

の道徳哲学を構成する諸要素の連関にはさらなる明晰な分析が求められるのではないか、といった意見、あるいはグルーシーとアダム・スミスとの比較がさらに求められるのではないか、という指摘がなされた。加えて、一般に多義的である「共感」概念の複雑さに関して、さらなる分析があれば、より研究が深められたのではないか、といった指摘もなされた。

加えて、文体が一部生硬である点や、体裁に十分な統一が見られなかった箇所が残った点が、今後の課題として指摘された。

しかし、これらの難点は、執筆者が今後の研究活動の中で解決していくものであり、上に挙げた具体的な研究課題も、執筆者の今後の研究課題として引き受けていくべきものと委員会は判断した。本論文の主題の希少さと重要性に鑑みれば、これらの難点は、本論文の成果を損なうものではないと言えよう。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。